

## 後鳥羽天皇火葬塚林相整備工事に伴う立会調査

本火葬塚は、日本海に浮かぶ隠岐諸島島前の中ノ島にある。本誌第57号において、台風による風倒木被害の復旧工事に伴う立会調査報告を行ったが<sup>(1)</sup>、その時の台風により失われた林相について新たに整備する工事が計画されたことにより、植栽箇所<sup>(1)</sup>の立会調査を行った。調査は平成22年2月8日～12日までの期間で実施した。

植栽箇所の掘削規模はそれぞれ長さ0.6m×幅0.6m×深さ0.6mであり、陵墓地内の23箇所に及ぶ。各植栽箇所は点在するのではなく、陵墓地内でも3つの区域〔隠岐神社隣接箇所（1～3）、火葬塚周辺（4～20）、行在所跡内（21～23）〕に分けられる（第35図）。調査の所見は以下のとおりである。

**隠岐神社隣接箇所** 表土の下に非常に堅緻な青灰色～黄褐色の粗砂を多く含む粘質土が検出された。陵墓地内でも高い位置にあたるが、隠岐神社との間で土堤状の地形となっており、陵墓地側は段状に成形されている。盛土によって成形された地形である可能性は低いため、地山と考えておきたい。遺構・遺物は認められない。

**火葬塚周辺** 特に下方は広範囲である。地形は傾斜地であり何段かの平坦地が形成されている。もっとも火葬塚に近い18は表土下が1層のみの確認にとどまるが、他は上層が暗褐色粘質土、下層が暗茶褐色粘土で、いずれも突き固めたように堅緻な土層である。これはどの掘削箇所でも同じ様相を示す。遺物もなく土層の性格を判断するのは難しいが、平坦地の形成されている面が、陵墓地周辺に現在も広がる水田・畑の状況と一連のようである。このことから、この区域は現在の陵墓地の範囲が確定される段階で、火葬塚隣接地にあった水田などがを新たに取込まれたものであり、水田の床土など耕作地の土層と判断される。遺構・遺物は認められない。

**行在所跡** 行在所跡とされる源福寺跡の基壇内植栽箇所については（第35図21・22・23の断面図）、各箇所とも厚さ5～10cm前後を中心とする版築状の土層が確認された。粘質土と砂質土が交互に積まれた部分もあるが、全体的には粘質土主体である。基本的には、本誌57号で報告を行った際の調査所見と同様である。遺物は認められない。

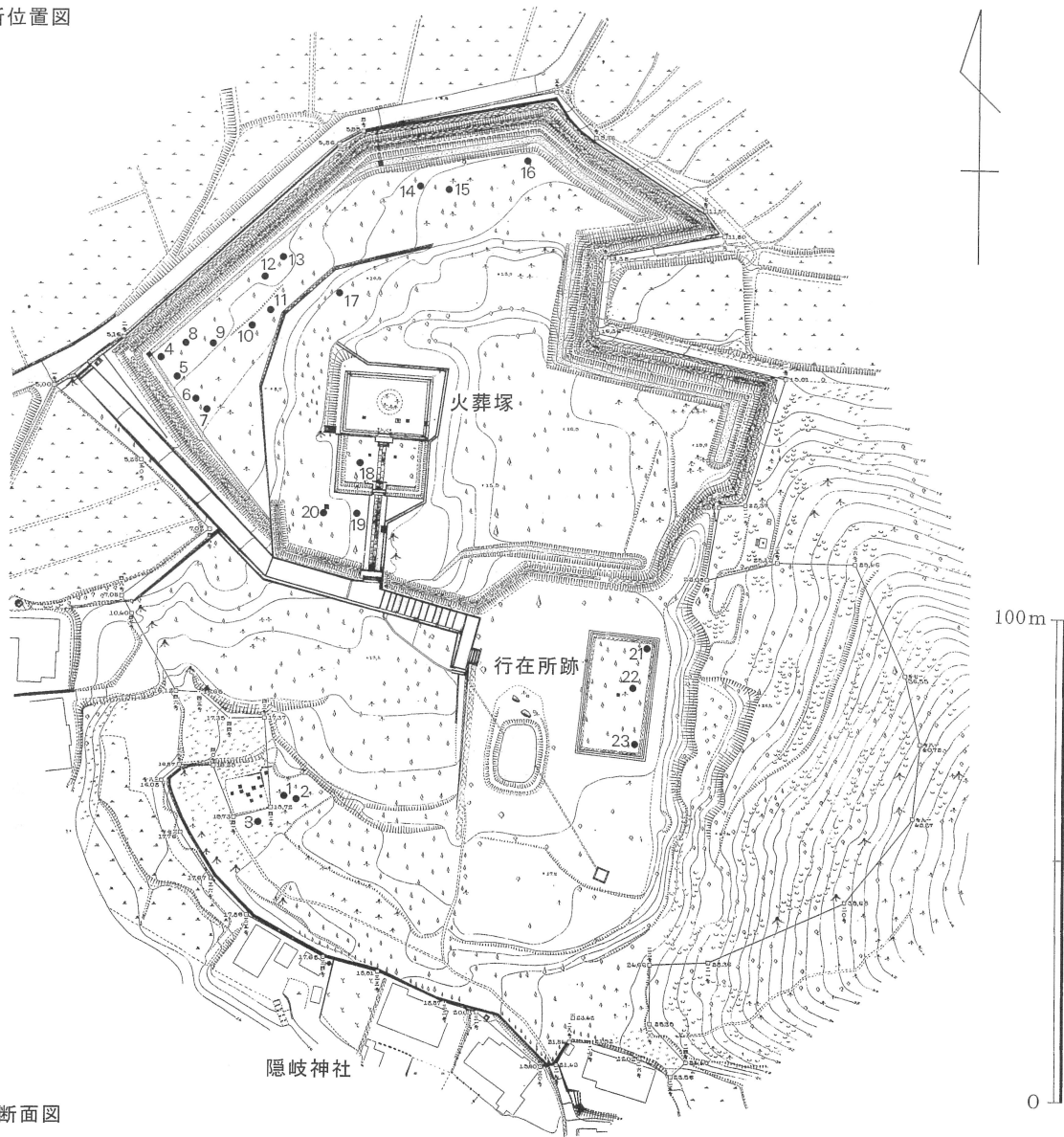
上記の結果を踏まえ、工事は予定通り施工した。

（清喜裕二）

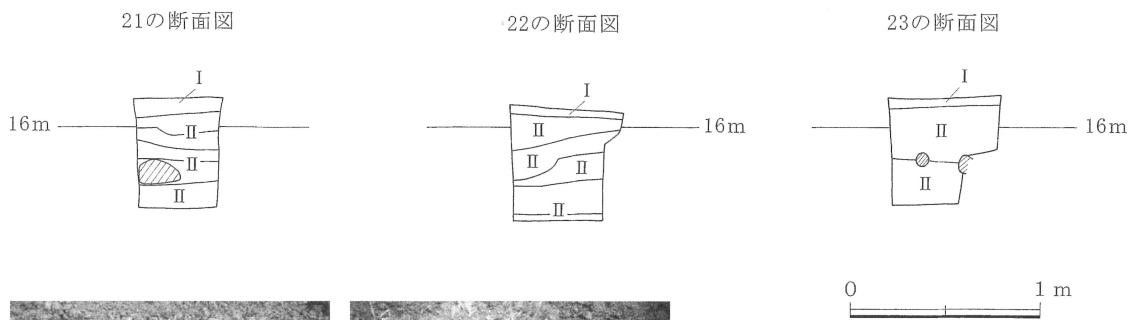
註

(1) 清喜裕二「後鳥羽天皇火葬塚風倒木復旧整備工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第57号、宮内庁書陵部、2005年。

調査箇所位置図



調査箇所断面図



21の断面



22の断面

第35図 後鳥羽天皇火葬塚 調査箇所位置図 (1/1500) および断面図 (1/40)